論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（教育学）	氏名	中西　さやか
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

ドイツにおける「幼児期の Bildung」に関する研究
−シェーファーのアプローチに着目して−

論文審査担当者

主　　査	教　授	七木田　敦
審査委員	教　授	深澤　広明
審査委員	教　授	丸山　恭司
審査委員	准教授	中坪　史典

〔論文審査の要旨〕

本研究は、Gerd E シェーファーの「Bildung アプローチ」に着目し、その理論的枠組みや教育構想の分析をとおして、「幼児期の Bildung」という新たな課題がドイツにおいてどのように受容されたのかを明らかにしたものである。

第 1 章では、本研究の主題である「幼児期の Bildung」を論じるにあたって必要となる視点を得るために、ドイツにおいて伝統を持つ Bildung 概念の用法について、①自己と環境との相互作用を表わすフンボルト由来の Bildung 概念、②「訓育」としての Erziehung と一対になった「陶冶」としての Bildung、③「教育」および「学校教育」を表わす Bildung という３つに分類した。そのうえで、これらの多様な意味内容で Bildung という語が使用されていることを念頭に、「幼児期の Bildung」をめぐる議論を分析する必要性があることが示された。

第 2 章では、ドイツにおける幼児期の教育課題の変遷を整理したうえで、2000 年代以降顕著となった教育政策における「幼児期の Bildung」の強調が何を意味するのかを明らかにした。その結果、ドイツ幼児教育の強調点は、伝統的な「保護」から「Bildung（教育）」へと移行しており、早期からのリテラシー教育や学校教育との接続という観点から、幼児期の教育課題が新たに提起されていることが明らかとなった。また、このような文脈において、Bildung という言葉は、従来学校教育で行われてきた認知的な教育を幼児期にふさわしい形で早期化することを表わすものとして用いられていることも示された。

第 3 章では、ドイツ幼児教育学において「幼児期の Bildung」をめぐってどのような議論が行われたのかについて、「自己形成」と「共同構成とコンピテンシー発達」という２つの Bildung 観に着目して検討した。先行研究において、これら２つの Bildung 観は、あらゆる面で対立的なものとして描かれてきたが、両者の本質的な相違は「個か社会か」という点にあるのではなく、学びや教育を構想する際の出発点にあることが示された。「自己形成」は子どもの内面的な世界像の構成プロセスを、「共同構成とコンピテンシー発達」では幼児期に獲得すべきコンピテンシーをそれぞれ出発点に据えており、このことが「幼児期の Bildung」をめぐる議論の論点となっていることが明らかとなった。

第 4 章では、以上に示された論点を踏まえたうえで、「自己形成」としての Bildung 観を基

盤とするシェーファーの「Bildung アプローチ」の理論的枠組みを明らかにした。その結果、「Bildung アプローチ」では、Bildung が幼児期の学びのプロセスの質にかかわる概念として位置づけられており、子どもがあらゆる感覚や感情、思考や言語などをとおして自らの世界を構成することを表わす「自己形成」とそのような子どもの「自己形成」を非言語的なコミュニケーションを含んだあらゆる方法で解釈し、尊重することを表わす「社会的合意」という二重の観点から「幼児期の Bildung」が捉えられていることが示された。「Bildung アプローチ」で最も強調されているのは、「子どもはどのようにして世界を構成するのか」というプロセスに目を向けることの必要性であり、そのようなプロセスを保育者が解釈・理解することを起点として、教育的な行為が導かれると考えられていることが明らかとなった。

第 5 章では、コンピテンシーモデルにもとづく教育構想との比較をとおして、「Bildung アプローチ」にもとづく教育構想の意義と課題について検討した。コンピテンシーモデルでは「何をどのように学ぶのか」ということをコンピテンシーの体系化によって明確化することが目指されているのに対して、「Bildung アプローチ」で目指されているのは子どもの主観的で多様な学びのプロセスを記述することであり、「子どもに見えていること」を解釈するための視点の精緻化が図られている。以上のことから、「Bildung アプローチ」にもとづく教育構想は、コンピテンシーモデルによって何が描かれないのかを示すものであり、幼児期の Bildung や学びにおいて過小評価されている側面を子どもの「自己形成」という視点から描き出そうとするものであることが明らかとなった。そのようなアプローチにおいても、コンピテンシーモデルと同様に描ききれないものがあるのではないかという課題が残されるが、機能的な目標への到達ではなく、子どもの「内面的な加工の力」を広げていくという新たな幼児期の教育課題が提起するものとして特徴づけることができる。

本研究の学術的意義として、次の点を挙げることができる。

第一に、「Bildung アプローチ」が認知的な教育とは距離を置く従来の幼児教育観とも、学校教育と共通性のある教育目標や教育内容を幼児教育に導入するアプローチとも異なるオルタナティブな方向性を示すものであることを明らかにすることで、従来「就学準備の重視」として描かれてきたドイツ幼児教育の変化を新たな視点から描き出したこと。

第二に、「Bildung アプローチ」の理論的枠組みと教育構想を具体的に検討することで、幼児期の学びにおける「非認知的なもの」の位置づけを再考し、「認知的なもの」と「非認知的なもの」という二分法的な理解を超えた新たな視点から、幼児期の学び論を構築するための基礎的な知見を示したこと。

第三に、コンピテンシーモデルとの比較から「Bildung アプローチ」の意義を検討したことで、学校との連続性を意識した能力モデルでは捉えることのできない学びの側面にアプローチするための新たな研究課題を提起したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 5 日